

## 『お伽草子 物語の玉手箱』展に触れて

文学研究科美学美術史学専修 市川 彰

去る平成11年11月24日より翌月7日の14日間にわたって、京都大学附属図書館において京都大学附属図書館創立百周年記念公開展示会『お伽草子 物語の玉手箱』展が開催されました。京都大学が所蔵する貴重なお伽草子が数多く展示されており、展覧会名称の副題に示されていたとおり、まさに「玉手箱」を開いた感を抱いた人は少なくなかったことでしょう。その「玉手箱」のなかには、物語だけではなく色とりどりの絵もふんだんに納められていました。物語＝お伽草子に関しては展覧会図録の解説にすでに簡明に説かれていますので、ここでは絵の話、とくにお伽草子とは切っても切れない関係にある奈良絵本とその鑑賞をめぐる、少しばかり思ったことを述べてみたいと思います。

奈良絵本とは、より広義には、いわゆるお伽草子を主として幸若・物語・謡曲などをその内容とする室町時代末期から江戸時代にかけて制作された絵入写本や絵巻物のことを指し示す言葉です。この奈良絵本は、名だたる絵師に依頼・注文して制作された誂え物ではなく、いわゆる出来合の既製品でした。その制作・販売の担い手は、京都や奈良、堺などの都市において中・近世に成立した絵画生産業者である絵屋であったようです。また、滝沢馬琴は『燕石雑志』において、お伽草子の絵巻物にふれて「書肆のしいれ画」と記していますから、職人的絵師を抱えた本屋もまた奈良絵本の生産者として想定することができます。

ここで奈良絵本という名称についても触れておかねばなりません。実のところ、その由来は明確なものではありません。魚澄惣五郎は『古社寺の研究』において、奈良・猿沢池の近くに絵屋町が存在していたことを指摘しています。そして、春日絵所など、いにしえには南都の社寺に属していた絵師たちが、時代の推移とともに

その帰属を離れて職業的町人として生計を立て、ついにはお伽草子などの絵をも手がけるようになり、奈良絵本の職人が形成されたのであろう、と推定しています。そして、この見解がほぼ定説として広く認知され、『広辞苑』などの多くの辞書類にも記されるようになったのです。

しかしながら、奈良絵本を奈良という土地において製作された絵本と見ることは少々難しいと思われ、今日では否定的な見解が多いようです。というのは、それ以後の研究によって奈良絵本という名称が近代、明治の中頃以降になってから作られた言葉であることが明らかにされており、明治42年の『文芸百科全書』がその初出とされているからなのです。このことからすると、特定の土地の名産品としての名称、たとえば京友禅や奈良晒のような言葉と同じ感覚で捉えてはならないようです。もちろんのこと、奈良に存在した絵屋もまた、奈良絵本の生産者としての条件を備えていたことは確かであるでしょう。ですが、現存する奈良絵本が制作された土地は奈良に限られることなく、たとえば京都などにおいても生産されていたのです。むしろ京都の方が生産量は多かったのかも知れません。とするならば、やはり奈良絵本という名付けに関しては、通説とは異なった事情を想定する必要があるように思われます。

ところで、奈良絵本に描かれた絵はどのように映るのでしょうか。私たちは徳川美術館や五島美術館に所蔵される大和絵巻の代表作である《源氏物語絵巻》など、日本美術史に燦然と輝く名品たちの洗練の極みを尽くした美しさに対し、陶醉に似た感覚を覚えてしまいます。しかし残念なことに、奈良絵本に対しては同様の想いを抱くことはないようです。展示されていた奈良絵本に対し、その美しさに心の奥底から感銘した人は少なかったのではないのでしょうか。そ

のような価値判断の表れでもあるでしょう、奈良絵本の造形的特質を形容する言葉として「稚拙」「下手」「素朴」といったものがしばしば見受けられます。また、奈良物や奈良刀といった言葉が、第一級の品ではない、価値の一段低いものを指し示していることは広く知られるところです。少々うがった見方をするならば、一級品ではない絵を奈良絵と呼び、それが通称として定着してしまったというような、奈良に思い入れを抱く方々にとっては悲しい状況が有ったのかも知れないと意地悪く想像してしまうのは私一人だけではなく、多くの人が思うところでしょう。

名付けの事情に対しての憶測はこれぐらいにして、次に奈良絵本がどのように鑑賞されていたのかについて想像をたくましくすることにしましょう。

奈良絵本が取り上げる主たる内容がお伽草子であることもあって、目で読み、声に出し、耳に聞き、そして絵を見、とその鑑賞はとても楽しいものであったことと想像されます。一人で楽しむのもよし、複数の人が一冊をともに楽しむのもよし、といった具合だったのでしょう。そして物語の内容とともに、その場면을視覚的に表した絵を眼にするとき、物語の世界はより豊かなふくらみをもってイメージされていたと思われます。ここで私たちは物語と絵画の幸せな結びつきの一例を目の当たりにしているのです。

さらに付け加えるならば、奈良絵本に書かれる漢字交りの平仮名文が行間を広くとって、比較的読みやすい流麗な文字で書されていることにも留意しておきたいものです。奈良絵本の絵の裏には、その絵を挿入する箇所を示す番号などが記されているものもあるそうですから、絵と詞書は別々の職人が担当したと考えられています。奈良絵本の鑑賞者たちは物語の内容もさることながら、頁をめくるごとに立ち現れる、組み合わせられた書と絵の競演をも楽しんでいただこう。

また奈良絵本の形態は、時代の推移による変化もあってでしょう、横本・縦本・大型縦本な

どとさまざまですが、その多くが金泥で秋草などの文様が描かれた表紙を持ち、そのうえに朱の題箋が貼られ、また見返しには金銀箔が置かれるなど、他の書物と比べてもとても美しく装訂されています。このような奈良絵本は、公家や武家、上層町人などの婦女子の婚礼にあたって、祝儀用の贈答本、婚礼時の柵飾本としても用いられていたところから、嫁入本という別称を持っています。数冊で一揃いをなしていた奈良絵本が嫁入り道具のひとつとして、蒔絵などによってきらびやかに装飾された書棚や書見台のうえを飾っていた状態を想像することは楽しいことです。考えてみれば当然のことですが、奈良絵本は頁を開いて読むためのものとしてだけではなく、頁を閉じた状態にあっても室内を飾る道具としても機能していたことがうかがわれるのです。

ここで少々、もどかしい現実が思い起こされてしまいます。私たちが「玉手箱」の中身に手を伸ばすことは許されません。愛らしい奈良絵本を簡単には手にして読むことも、室内に飾ることもできません。当時の鑑賞者たちがそうしたように、書見台の上に置き、あるいは膝のうえに、畳の上に置いて奈良絵本を楽しむことができないのが現実です。当然のことですが、展示ケースのなかに納められている状態は、奈良絵本のもともとの鑑賞形態ではありません。奈良絵本が後世に伝えていくべき先人からの貴重な遺産であるがゆえに致し方のない面は十分に考慮されなければならないでしょう。しかしながら、実際に手にとって次の頁を繰ってみたいという想いに駆られるのもまた人情というものです。

そのようなわがままな人情を考慮してでしょう、展示会場では電子展示が試みられていました。もちろんのこと、解像度の問題、指先で頁を繰っていくことと、マウスをクリックすることなど、埋めることのできない溝は多々あります。しかしながら、それを望むすべての人が触れることが許されない以上、仮想現実であるにせよ、電子展示という方法は奈良絵本を鑑賞す

るうえで非常に有効な代替手段であることは確実であると思われ、もどかしさは少しばかり解消されたのでした。

以上、奈良絵本とその鑑賞をめぐって雑駁な見解を述べてきました。奈良絵本への関心は近時ますます深まりつつあり、国際会議が開催さ

れたり、研究書の出版も行われています。さらなる研究の充実が望まれているなか、『お伽草子 物語の玉手箱』展が催されたことは、意欲的な展示が試みられたことも含め、非常に意義深いことと思われました。

(いちかわ あきら)

## 京都大学図書館百年

### 思い出すままに - 1972(昭和47)年の経済学部図書室の移転

内藤 昭子

昨年は附属図書館も創立100周年だったが経済学部もまた創設80周年を迎え、その記念として出版された『京都大学経済学部八十年史』を見せていただき早速めくったのはやはり「図書室」の頁だった。京都大学在職中に在籍させて頂いた



赤レンガ作りの旧研究棟  
(現在は法経北館が建つ)  
(昭和46年春)

部局にはそれぞれ独自の様々な思い出があるが、経済学部図書室にもまた大きな思い出がある。

今、八十年史を開きながら経済学部図書室の、特に書庫の移転の一端を思い出すままに綴らせて頂こう。1971(昭和46)年4月1日付で経済学部閲覧掛長を承り、翌年には図書室等の移転作業があることは聞いてはいたが、実情を知りこの移転をチャンスに、何としても解決しなければならない大きな問題が幾つもあることに驚いている余裕もなく、早速移転にむけての準備計画に取り組んだのだった。

新しい建物は旧館の跡地に建てられたため、

事実上、旧館書庫部分以外の解体 新館建設 第1回図書移転 旧館残部解体 新館完成 第2回図書移転というように、図書は建設途中と完成後の2回に分けて移転しなければならなかった。

1972(昭和47)年1月5日から約40日の予定で開始された第1回移転時にはまだエレベーターは運転できず、しかしその時に移転の図書は新書庫の5層等に配架予定であったため、コンテナに詰められクレーンで5層のベランダまで吊り上げて運び込むという、きっと余り例がないであろう方法がとられたのだった。



クレーンでコンテナを吊り上げての図書移転